

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	園田 浩司
論文題目	カメルーン狩猟採集民バカの子どもにおける社会的相互行為		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、カメルーン共和国東部州の熱帯雨林に暮らす狩猟採集民バカの子どもたちをめぐる社会的相互行為の特徴を、生業活動場面における会話の分析を通じて明らかにしたものである。</p> <p>第1章ではまず、狩猟採集民の子ども研究に対する本論の立場が明らかにされる。これまで、狩猟採集民において大人が子どもたちを放任しており、子供たちは自律的に活動しているという報告が多くなされてきた。それに対し本論では、子どもの生業活動への参加において展開される対面相互行為を分析することによって、「放任」や「自律」といった言葉では表現しきれない、大人や他の子どもたちとの緩やかな関係を築くための相互行為技術を明らかにしていくという方針が示される。次いで、調査地と、調査対象であるバカの概要が記述される。</p> <p>第2章においては、バカのライフステージの分類と「子ども期」の確定、子どもの活動の詳細、居住地の生態環境といった民族誌的記述がおこなわれる。</p> <p>第3章では、大人と子どもが共同で取り組むオニネズミ猟や、食用昆虫採集の場面が分析される。それらの活動の中で、子どもはしばしば大人の指示より先にさまざまな行為を開始しているが、大人はその行為を禁止したりねじ曲げたりするのではなく、うまく受け、その方向性をたくみに引き出そうとしていた。そこではしばしば「私のようにやりなさい」という教育的な指示ではなく、「私も一緒にやります」という、子どもの行為に乗り込む態度が見られた。このことは、他文化に見られるさまざまな子どもに対する態度とは異質な、バカにおける際だった特徴だと言える。</p> <p>第4章では、もうひとつの大人と子どもの協働作業である、獲物の解体の手伝いに焦点が当てられる。ある場面においては、「獲物のダイカーが断末魔で『ムフー』と鳴いた」という子どもの語りに大人が素直に驚き、その言葉を繰り返すというやりとりが見られた。また別の場面では、子どもによる肉の取り分の要求が観察された。これは身勝手な子どもの振る舞いかと思われたが、実はそれは、会話の参与役割を獲得しようという相互行為上の戦略なのだと分析された。ここでも大人たちは、そういった、ある意味で生意気な子どもの行為をとがめるでもなく、穏やかに追認していた。子どもは大人を相手に、さらには大人を「資源」として、子ども独自の文化的活動を構築しているが、こういった子どもの文化実践は、大人との緩やかな関係のなかでこそ達成されるものであると考えられた。</p> <p>第5章では、子どもたちだけでおこなわれたオニネズミの集団猟における会話が分析されている。そこでは、会話分析において基本とされる「質問」－「応答」といった発話のペア (隣接対) や、それによって達成される意見調整はほとんどおこなわれず、応答を期待しない言い放ち、他者の発話へのあいのみ、「うん」「わかった」などといった同意表現の不</p>			

在、といった現象が見られた。すなわちここでは、「話し手」「聞き手」「傍参与者」といった、社会学者ゴフマンの言う「参与枠組 participation framework」が確定しがたかったのである。これは、獲物の動きや状況の変化など、常に周囲に注意を払っておかねばならない集団猟によって作り出された構えであると分析されている。

以上の分析を通して第6章の総合考察では、バカに見られた相互行為的な特徴が、何に原因するのかが考察される。狩猟採集・遊動生活という彼らの生き方は反映していると考えられるが、そこには社会学的条件と生態学的条件が存在する。前者においては、つねに変転する社会関係の中で、相手との綿密な意見調整はむしろ障害であり、「相手の行為を受ける」という態度の方が都合がいいと分析されている。また後者においては、迅速に森の対象物に注意を向ける必要が、相手との「やり取り」ではなく、言い放ち、あいのり、といった発話形式の優位性を生んでいるのだと分析されている。このような環境のもとで、バカの子どもたちは、大人たちにゆるやかに承認されつつ行為しているのだと結論される。

(論文審査の結果の要旨)

これまでの狩猟採集民社会の子ども研究においては、「大人の子どもへの寛大さ (indulgence)」「気楽な (easygoing) 関係」「教えること (teaching) は珍しい」といった記述がなされてきた。つまりそこでは、明示的な「教育」と言えるものは希薄である、ということが主張されてきたのである。本論文では、綿密な会話分析的手法を用いて、こういったいわばお座なりな解釈を排し、狩猟採集民社会における子どもの相互行為の、より深い理解に到達することがと試みられている。

本研究は、カメルーン東南部に居住する狩猟採集民バカを対象とした長期のフィールドワークに基づいている。研究において特筆される貢献は、以下の3点である。

まず第1点は、その研究の手法および分析視点である。本研究では、手法としては会話分析 (conversation analysis) が用いられている。よく知られているように、会話分析は会話の音声の詳細な書き起こしをデータとし、そこで起こっている相互行為的状况がいかにして組織化されているかを明らかにするという方法論である。この手法によって、人々がおこなっているミクロな相互行為の方略をあらわにすることが可能になる。狩猟採集民の研究においても、この方法論が用いられた例はあるが、本研究においては、次の2点が独創的である。ひとつは、子どもの会話を対象にしたことである。子どもと大人はさまざまな意味で非対称な関係にあるが、そういった関係の中で、どのような相互行為がおこなわれるかが興味の対象となっている。実際、園田氏がこの研究を始めた一つのきっかけは、バカにおいては大人と子どもがいかに対等にやりあっていたさまに驚いたことだったという。もうひとつは、生業活動の中での会話が扱われていることである。従来の狩猟採集民における会話分析研究は、複数人がベンチに座っているなど、「会話しかすることがない」状況が対象となることが多かった。狩猟採集という生業活動がどのように相互行為に関連しているかを見るには、この研究のような場の選択は必須であろう。

第2点めの貢献は、上記のような手法を用いて、狩猟採集民の教育観を転換したことである。一見すると「教育が存在しない」と言われてきた狩猟採集民社会ではあるが、ミクロな会話分析、相互行為分析をおこなってみると、大人たちには、目立たない形ではあるが、「子どもの行為を受け」さらには「子どもの行為に相乗りする」というやり方で、子どもの行為の志向性を引き出そうとする態度が見られることが明らかになった。こういったやり方は、学校教育に典型的なI-R-E連鎖 (Initiation「〇〇は何ですか？」—Response「××です」—Evaluation「よくできました」といった) とは対照的だと言える。一方、子供たちも、大人のそのような容認的な態度のもとで、自らの行動規範を追認したり、あるいは会話への参与をめぐる駆け引きをおこなったりと、主体的に自らの言語的な社会化をおこなっている。さらに子どもだけでおこなう集団狩猟においては、通常の会話における「やり取り」の枠組みに乗らない共同構築的な発話がおこなわれていることが明らかになった。こういった傾向は狩猟採集民の大人の会話においては確認されているが、それがすでに子どもの段階から生じていることが示されたのである。

第3点として、こういった子ども—大人関係は、人類学、相互行為論の領域だけではな

く、教育学においても大きなインパクトを持つと考えられる。もちろん「子どもの自主性・主体性を尊重する」というスローガンは目新しいものではないが、それを実行しようとしても、どうしてもそこに何らかの意味での「大人の指示」が紛れ込んでしまう、という状況から脱するのは困難なのである。もちろん、バカたちのやっていることをダイレクトに先進国の教育現場に持ち込むのは難しいが、バカ社会で何が起きているかをきちんと見きわめ、そこから学んでいくことは、本研究の延長として大きな可能性を孕んでいると言えるだろう。

会話分析を含む相互行為研究は、ともすれば「それはわれわれも普通にやっていることではないのか」「そこでいったい何が面白いのか」といった批判にさらされる。そういった批判を真摯に受け止めつつ、フィールドで感じたバカの相互行為の不思議さをけっして手放さず、リアリティを持つ記述をおこなおうとしてきた園田氏の努力は本論文に結実しており、高く評価できる。またそこから、今後の狩猟採集民研究や教育学における新しい展開が期待できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年2月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。